

カナダ日系収容メモリアル・センターに関する研究¹⁾ — 日系二世への聞き取り調査と展示物の考察を中心として —

大石 文朗

The Study on Nikkei Memorial Internment Centre at New Denver in Canada
with a Focus on Interviews with Nikkei Nisei and Displays at the Centre

Fumio Oishi

1. はじめに：研究の目的と意義

第二次世界大戦がもたらした影響を抜きにして、日系カナダ人の歴史を語ることはできないであろう。故に、アイデンティティ、文化変容、歴史観などを中心に、同大戦に関わる様々な日系カナダ人の研究が行われてきた。特に、リドレス運動では、戦時中の差別的処遇が取り上げられ、それに関連する日系人の文学さらに個々の体験談などが、人種差別の観点から調査および研究が行われた。それらのカナダ社会への働きかけの結果、1988年にカナダ政府から日系カナダ人に対して謝罪文さらに補償金が支払われ、表面上この運動は終止符を打った形になった。それ以降も日系カナダ人は、地道ではあるが自らのエスニック・グループへの理解を広げるために様々な活動を行った。その一環として当時の強制収容所を戦争の記憶として保存する動きもあらわれ、その結果、ブリティッシュ・コロンビア州（British Columbia 以降、カタカナ表記のみとする）ニューデンバー市（New Denver 以降、カタカナ表記のみとする）に、カナダで唯一当時の収容所生活を物語る物証を展示した日系収容メモリアル・センター（Nikkei Memorial Internment Centre 以降、カタカナ表記のみとする）が設立された。

本研究の目的は、同センターの運営者で収容経験のある日系二世への聞き取り調査を行い、それをセンターの展示物と関連性をもたせて考察し、発信者側としての戦争の記憶に対する「思い」と「意図」、さらに内在するエスニシティを検討することである。同センターは、1994年の7月に開館され、第二次世界大戦当時の日系カナダ人強制収容所の一部が当時のまま保存されており、多くの遺物も展示されているカナダで唯一の施設である。他の強制収容所はすべて消滅しており、当時を語る遺物の施設としてはカナダ屈指のセンターである。さらに施設の運営も収容時代に創設された協和会²⁾が行っており、各収容所で戦時中に設けられた互助会のような組織が、今日まで継続して実際に活動しているのは他に類がない。そして、現在の中心的な施設運営者は、ニューデンバーの強制収容所の経験者で、約60年間協和会のメンバーとしてその地に関わってきた日系二世のカナダ人である。故に、戦争経験世代の日系カ

ナダ人の遺物に込めた「思い」と「意図」を調査するには、日系収容メモリアル・センターは理想的な調査対象であると思われる。

また、ニューデンバーの強制収容所は戦時中のみならず、第二次強制移動、いわゆるカナダ政府の日系人散在政策が行われた時にも、日系カナダ人の居住場所として重要な役割を果たした。この散在政策は、1945年に終戦を迎えたにもかかわらず、ブリティッシュ・コロンビア州から日系カナダ人は追放を命じられ、1949年まで続いた政策である。しかし、唯一ニューデンバーの強制収容所だけは、重度の結核病患者とその家族、身寄りのない高齢者を受け入れるため、1957年まで収容施設を利用して住ませ、その数は約1,200名に達した。故に、他の強制収容所の施設はすべて終戦を迎えるとともに取り壊されたが、ニューデンバーの施設だけがその後も使用されることとなった。1957年以降は、希望者数百名に対して小屋や敷地が政府から与えられたが、これら一連の出来事が、奇跡的に当時の収容小屋を現存させた大きな要因となった³⁾。

戦争の記憶は様々な角度から議論され、それらが文書として記録されたり、あるいは遺物として保存されたりする。国家的事業という位置づけの戦争の記憶の場合、莫大な資金を投じて施設が建設され、また大量に貴重な関係文書や遺物類が収集される。そして、それらは場合によっては、教育の一部として組み込まれる。他方、個人的な草の根的活動の場合、地道な努力によって社会的に徐々に浸透し認められていくことになる。いずれにせよ、それらに込められた発信者の「思い」は千差万別であるが、共通した点は、次世代に伝えたいという真摯な気持ちと熱意であると思われる。収容当時の様子を保存する貴重な同センターが、後世の人々にどのような「思い」と「意図」で戦争の記憶を伝えたいのかを明らかにする本研究は、日系カナダ人の歴史やカナダにおける日系人のエスニシティに対して、収容経験者がどのように捉えているのかを知るための貴重な手がかりになるものと思われる。

2. 調査の方法

ニューデンバー市に住んでいた多くの日系人の方達は他へ移り住んだり、または、すでに亡くなれたりして、収容経験者の二世の方は8名ほどが現住している状態である(2004年の時点)。また、いずれの方も80才を超えて高齢のため、中には自宅から外に出るのもままならない方もおられるのが実情で、実際にはその8名の内3名が中心となってセンターを運営している。

調査対象であるカナダ、ブリティッシュ・コロンビア州ニューデンバー市の日系収容メモリアル・センターへ2004年(11日間)、2005年(4日間)、2006年(4日間)、2008年(2日間)にわたって現地へ筆者が訪問して、協和会メンバーで、センター運営の中心的役割を果たしている収容経験者である日系カナダ人二世の方達へ聞き取り調査を行った。その際、センターをより理解するために、「センターに展示された遺物」、「遺物の展示のされ方」、「設立主旨や設立過程に関する資料」、「周辺の環境」なども合わせて調査した。

3. 強制収容全体におけるニューデーンバー強制収容所の規模的位置づけ

1941年12月7日に日本帝国海軍がハワイの真珠湾を攻撃してから、日本と交戦状態になったカナダ政府は、すべての日系カナダ人を1942年4月1日までに、ブリティッシュ・コロンビア州太平洋岸から100マイル以東へ強制移動させた。下記は、ブリティッシュ・コロンビア州安保委員会（British Columbia Security Commission）が、1942年10月31日に報告した日系カナダ人の当時の状況である⁴⁾。

1942年の日系カナダ人の状況（総計：22,216名）

- * Internment Camps: (合計 12,629 名)
 1. Greenwood (1,777 名)
 2. Slocan Valley (4,814 名)
 3. New Denver (1,505 名)
 4. Sandon (933 名)
 5. Kaslo (964 名)
 6. Tashme (2,636 名)

- * Road Camps/Work Camps (合計 2,161 名)
- * Sugar Beet Farms (合計 3,991 名)
- * Hastings Park (合計 105 名)
- * In Detention in Vancouver (合計 111 名)
- * Self-Supporting Status (合計 1,161 名)
- * Prisoner of War Camps, Ontario (合計 699 名)
- * Special Employment (合計 1,359 名)

報告書が示すように、6カ所の地域の強制収容所（Internment Camps）に当時の日系カナダ人の57%が強制移動させられた。しかも当初は女性と子ども、そしてお年寄りが収容の対象となった。男性は道路建設／労働キャンプ（Road Camps/Work Camps）やシュガー・ビート農場（Sugar Beet Farms）での労働力として利用された。これは戦時措置法（War Measure Act）によって、婚姻状況や国籍にかかわらず18才以上の日系カナダ人の男性が集められた。彼等は、ブリティッシュ・コロンビア（以降、B.C.と略す場合がある）州のRevelstoke-Sicamous HighwayやHope-Princeton Highway、アルバータ州のYellowhead Highway、オンタリオ州のSchreiber-Jackfish Highway等の道路建設に送られた。1時間25セントの賃金が支払われたが、それらのお金は強制収容所の運営費にあてるとの名目でほとんどが没収され、実質的にはただ働きに近い状況であった。

また、1,161名が自活移動（Self-Supporting Status）として、カナダ連邦警察の監視下において、

すべての生活費等を自費でまかなうことを条件に家族と一緒に暮らすことが許された。それ以外の日系カナダ人は、働き盛りの男性は家族から引き離され、残された女性、子ども、老人は強制収容所へ移動させられた。故に実際には、かなり経済的に裕福な家族がこの自活移動の対象であり、次の7地域での滞在が許可された。

1. LILLOOET (BC州)
2. BRIDGE RIVER (BC州)
3. MINTO CITY (BC州)
4. MCGILLIVRAY FALLS (BC州)
5. SWING CREW (BC州)
6. CHRISTINA LAKE (BC州)
7. ASSINIBOIA (サスカチュワン州)

そして、699名の日系カナダ人の男性が、これら不当な扱いに抗議したり命令に従わなかったために逮捕され、捕虜収容所 (Prisoner of War Camps) に送られた。彼等の多くは裁判も開かれず、マシンガンで武装した兵士によって監視され、鉄条網で隔離された刑務所に入れられた。彼等は背中に大きな赤い丸が描かれた囚人服を着せられて屈辱的な扱いを受けた。

このように日系カナダ人の場合、9587名つまり全体の43%が強制収容所以外を強要されたり、もしくは選択することとなった⁵⁾。当時の米国本土における日系アメリカ人の場合は一家が同じ場所の収容所に強制的に入れられたが、カナダの場合は米国とは異なり家族をバラバラにさせた強制収容であった。それら収容所の内、収容人員の規模からみて一番大きな施設は、スローカンヴァレー (Slocan Valley) の4,814名で、一番小さな施設はサンドン (Sandon) の933名であった。ニューデンバー (New Denver) は1,505名で第4位の規模であり、まさに中間ぐらいに位置する収容施設の規模であった。

4. 第二次強制移動 (The Second Uprooting)

1945年の8月に終戦を迎えるが、その後も日系カナダ人は強制収容前の太平洋岸にあった自宅へ帰ることは禁じられた。いわゆるカナダ政府の散在政策によって一部の日系人を除きブリティッシュ・コロンビア州から退去命令が出されたのであった。ここでいう一部とは自活移動の人々、カナダ太平洋鉄道 (Canadian Pacific Railroad) などの大企業に雇われている人々、医者など高度な技術を持った人々などであった。他の多くの日系カナダ人は1945年の春に、すでにカナダ政府は次の2つの政策を公表していた。

- ① ニューデンバーを除くすべての強制収容所を閉鎖する。
- ② ロッキー山脈よりも以東に移動するか、日本へ追放されるか、どちらかの選択をする。

この第二次強制移動は、第一次強制移動よりもさらに過酷なものであった。強制収容所は良い意味でも悪い意味でも同じ境遇の人たちの集まりであり、その中で助け合っていくことができ

た。しかし、第二次の移動は、自らの生計をたてるため、もしくは家族を支えるために職を求めて東部へ移動し、日系人以外のカナダ人と上手くやっていくことが求められた。しかし、東部での日系カナダ人に対する人種差別は露骨であり、また、強制収容所で過ごした約4年の月日が子どもたちの教育を遅らせ、服装もみすぼらしいもので、奇妙な日本語混じりの英語を話すため、より社会にとけ込みにくい状況であった。ある日系人は当時の様子を次のように述べている。

Nikkei children were behind in their education, wore out-of-date, threadbare, "camp clothes" and spoke an odd mixture of Japanese and English, a jargon referred to as "camp talk". Prior to the war Japanese Canadian children had been cultured and fashionable. Now they found themselves socially isolated from the eastern youth and discouraged from associating with other Nikkei⁶⁾.

この第二次強制移動は、カナダ社会での日系カナダ人の孤立を自覚させ、日系社会における日系人同士の絆をも弱めていった。他方、3,965名の日本へ送還された日系カナダ人にも悲劇が待ち受けていた。日本政府は彼等に対して日本国籍を認めない意向を示したのであった。敗戦で混乱した当時の日本社会で、多くの送還された日系カナダ人が帰属する国を失いホームレスになり、アメリカ赤十字の援助に頼らざるをえなくなり、その後消息が分からなくなった人たちも大勢いた。これらのように第二次強制移動は、第一次強制移動よりも日系カナダ人をまさに散在させ、カナダ社会からも日本社会からも受け入れられないことを日系カナダ人に知らしめたのであった。

しかしながら、この第二次強制移動でニューデンバー収容所だけは、他の収容所と異なり引き続きブリティッシュ・コロンビア州安保委員会の監視の下、日系カナダ人を受け入れた。この施設だけ残したのは、ニューデンバー療養所が日系カナダ人を治療する医療施設として存在したのが一番大きな理由であり、患者を引き続き治療する必要に迫られたからであった。故に、結核病患者、他の重い病気にかかっていた患者、患者の家族、療養所のスタッフが対象として、収容施設の使用が許可された。また、その他にも身寄りのない高齢者のみが施設使用の許可がおりた。その数は1,277名で389家族であった。その後1957年によろやく、ブリティッシュ・コロンビア州安保委員会のニューデンバー・オフィスが閉鎖になり、このニューデンバー収容施設は閉鎖された。終戦から実に12年後のことであった。カナダ政府は残されたバラック小屋とその土地を使用している人たちの財産として与え、幾人かはニューデンバーの地にとどまったが、多くの人たちが職を探して他の地へ去っていった。1987年の協和会の報告では、ニューデンバーに住んでいる日系人の数は42名のみであった。

5. 日系収容メモリアル・センターの運営者への聞き取り調査

現在センターは、戦時中の1943年に結成された協和会のメンバーが中心になって運営され

ている。戦時中にカナダにおいて結成された日系人会が60年以上にもわたって、同じ場所で継続して活動を行っているケースは他に類がないであろう。1945年の散在政策や時の経過と共に、収容時の小規模な日系人会はほとんど活動がなされていないか、自然消滅してしまっている。故に、貴重な協和会の活動であるが、2004年に筆者が訪問した時には、協和会のメンバーはすでに8名しかニューデンバーに、皆80才以上のご高齢ということもあり、実際は3名のみが直接センターの運営に携わっているという実情であった。その3名の内 Mrs. Pauli INOSE（以降、イノセ夫人とする）と Mrs. Kiyoko TAKAHARA（以降、タカハラ夫人とする）に、2004年と2005年に貴重なお時間をいただいて聞き取り調査をすることができた（実名を本論に載せることについては快諾を得ている）。しかし、2006年の訪問時には、その年の3月にイノセ夫人はすでに他界されており、タカハラ夫人のみへの聞き取り調査を行った。ここに改めてイノセ夫人のご冥福と色々ご教授いただいたことへの感謝の意を表したい（2008年もタカハラ夫人への聞き取り調査のみである）。

この聞き取り調査の目的は、日系収容メモリアル・センターの設立主旨、並びにどのような「思い」を伝えるために、現在センターを運営しているのかを調査することにある。故に、その調査目的と合致した部分の会話を逐語的に抜粋して、その内容の考察を試みていく。その考察対象の会話部分に触れる前に、聞き取り調査に応じていただいた、イノセ夫人とタカハラ夫人の略歴を次に紹介する。

*イノセ夫人の略歴：1919年にブリティッシュ・コロンビア州サーリー（Surrey）の日本人街に生まれた日系二世。両親は宮城県仙台市出身で、県人会の知り合いを頼ってカナダに渡った。小学校の頃は、平日は一般の小学校に通い、土日の週末のみ日本語学校に通った。故に、今でも日本語よりも英語の方が楽であるが、通常の日本語会話なら支障はないとのことである。1942年ヘイスティングス・パークの収容を経てニューデンバー収容所に来た。1945年の散在計画による強制移動時には結核を患っていたため、ニューデンバーの療養所に留まった。以来今日まで同市に在住している。

*タカハラ夫人の略歴：1917年にブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー・アイランド（Vancouver Island）に生まれた日系二世。小学校の頃は、平日は一般の小学校に通い、帰宅後日本語学校に通った。日本語の読み書きもでき、今でも英語よりもどちらかという日本語の方が楽であり、時折通訳や翻訳を頼まれるとのことである。1942年ヘイスティングス・パークの収容を経てニューデンバー収容所に来た。戦後の1946年8月に、ご主人と当時5歳と2歳の子どもたちと一緒に日本へ帰国した。1952年にご主人が事故で他界されたため、当時祖母がいたニューデンバーへ1955年に戻ってきた。それ以来同市に在住している。

*抜粋した会話内容：(Iをイノセ夫人、Tをタカハラ夫人と以下表記する)

筆者：日系収容メモリアル・センターをどうして建てようと思ったのか、その頃の状況についてお話をいただきたいのですが。

T：ミセス・カメガヤ (Mrs. Kamegaya) がいろいろな所へ手紙を出してがんばったんです。カナダの政府にも出しましたし、日本の大使館や色々なカンパニーへも出しました。

I：日本のあるカンパニーは (センターの) グランド・オープニングのときにテレビを送ってくれました。

筆者：ミセス・カメガヤは今までニューデンバーにおられますか？

I：いえすでにパス・アウェイ (pass away 亡くなる) されました。

筆者：いつ亡くなったんですか？

T：グランド・オープニングがすんですぐでしたから……、ナインティーン・ナイティフォー (1994年) です。

筆者：ミセス・カメガヤはニューデンバーのインターンメント・キャンプ (Internment Camp) にいたんですか？

T：いいえ。カスロ (Kaslo の Internment Camp) におったんですが、その前はバンクーバーで日本語学校の先生をしておられました。ニューデンバーへはたしか……ナインティーン・シックスティーズ (1960's) の中頃……ナインティーン・シックスティファイブ (1965年) に来られたと思います。

筆者：なぜミセス・カメガヤはセンターを建てようと思ったんでしょうか？

I：それは日本人としてのアイデンティティやカルチャーを失わないように……、私たちが受けたようなこと (戦中戦後の不当なカナダ政府からの扱い) が二度とないように……、みんなに知ってもらおうということだったと思います。

T：差別がないようにという願いです。

筆者：インターンメント・キャンプに送られている時は、自分達は差別されているという思いだったのでしょうか？

T：ヘイスティングス・パーク（Hastings Park）からここ（New Denver）へ移されるまでは、何が起きているのかわからなかったです。周りの人で自分たちはむしろ守られるために（保護されるために）集められたと思っている人もいましたから。でもそのあとのいつ終わるか分からない粗末なインターンメント・キャンプの生活で、差別されているという思いはみんな持っていたと思います。

I：この近くにあるサン（San (Sanitarium 療養所)）やシャック（Shack 強制収容時の小屋）もジャパニーズ・カナディアン（日系カナダ人）が建てたんです。自分たちで生活を良くしていったんです。

筆者：当時のことを子どもさんと話されることがありますか？

T：全く話さないです。子どもは今トロントにいて、結婚して子どももいますが、年に何回か会ってもあの時の話はしません。また、子どもがハイスクールやカレッジの頃もいやな思い出なので話すことはなかったですね。

筆者：日本についてどう思いますか？もとはといえば日本がパールハーバー（Pearl Harbor）を攻撃して戦争になり、エネミー・エイリアン（Enemy Alien 敵性外国人）としてカナダで差別を受けることになったと思いませんか？

I：戦争はバカなことです。多くのひとが苦しみます。日本の多くのひとも苦しんだと思います。

T：私はナインティーン・フォーティシックス（1946年）に主人と子どもたちとで日本に帰りましたから、その頃の日本を知っています。何しろ食べるものを手に入れるのが大変で……日本も今はずいぶん変わりましたね。今のように何でもあるようになるなんて、そのころには思いも寄らなかったですよ。汚い服を着た身寄りのない子どもたちや戦争で足や腕がない人たちもそのころはいました。私たちはたまたま遠い親戚が田舎にいたのでそこを頼って最初は行きました。……戦争は二度と起こしてはいけません。

I：日本には女学生以来行ってませんが、たまにこのセンターにも日本のステューデントのグループが来りますし、日本語は私は読めませんがマガジンなんかもバンクーバー

で手にはあります。お父さんやお母さんが生まれ育ったところですから、特別の思いはあります。

T : 戦争まえにも白人の私たちに対する差別はあったと思います。わたしたちだけでなくこちらへんではドゥーカボー（ロシア系移民）に対する差別もありました。でもエネミー・エイリアンとしてインターンメント・キャンプに送られ、なにもかもうばわれてしまうのはやっぱり戦争があったからだと思います。戦争に勝ち負けはありません。どちらの国の人も苦しむだけです……。

I : ほんと。平和でなければいけません。

T : 私はハイク（Haiku 俳句）とカリグラフィー（Calligraphy 書道）をします。ハイクは日本語と英語の両方でします。

筆者：あっ、そういえば、センターに展示された中にも俳句が書かれた短冊がありました。すごい上手な字が筆でかかれていましたが……。

T : ミセス・カメガヤも英語と日本語でハイクをしていました。ハイクを通して色々な人と仲良くなれたと思います。見られたと思いますがインターンメント・キャンプでもボン・ダンス（Bon Dance 盆踊り）とか餅つきをやったりしました。そうゆうことでみんなが仲良くなれたと思います。

筆者：んんん……。結局、日本的な文化や行事は人と人を結びつけるきっかけだったんですね。特に一世の人たちを結びつける共通のものという日本人的なもので、しかも多くの人が参加できる行事的なボン・ダンスなんかがいいですね。

T : そうやってこれまで来たので日本の文化を大切にしたいと思います。もう今では年寄りが数人しかいないのでボン・ダンスなんかはできないですけど……、近くのエレメンタリー・スクールの子がセンターに来たときには、折り紙なんかを教えてあげると喜ぶます。

筆者：インターンメント・キャンプの時、以前からニューデンバーに住んでいたローカルな人たちは、収容されている日系カナダ人に対してどのような様子でしたか？

I : ここに来たときにはゴーストタウンでスリー・ハンドレッズ（三百）くらいの人しかい

ませんでしたね。そこにモアザン・ワン・サウザンド（千以上）のジャパニーズ・カナディアンがきましたから、前から住んでおった人のほうがびっくりしたでしょうね。

T : センターにいろんなベジタブルをうえたガーデンがあったと思いますが、あれは前からここに住んでいたドゥーカボーから買ってそだてたものです。

I : 近くのチャーチは（収容されている）子どもたちに英語を教えてくださいました。

筆者：結局収容されていてほとんど自由がないわけですから、そんなに関わりを持ってなかったですよ。

I : ニューデンバーのビー・シー・エス・シー（BCSC (British Columbia Security Commission ブリティッシュ・コロンビア州安保委員会)）が目をはからせていたものだからね……。

筆者：現在ニューデンバーに住んでいて周りの人、特に白人の人たちは何か特別な様子がありますか？

T : 今はみんな友達です。まったく同じように良くしてくれます。この（地域的な）集まりがある時には、同じように参加しています。

I : その家の白人のハイスクールの子はセンターを手伝ってくれています。

筆者：白人の人たちは当時のことを……どのように思っているというか……インターンメント・キャンプのことを話されたことはありますか？

T : ほとんどの白人は、どういった差別をうけたのか知らなかったみたいですよ。エイティーズ（80年代）にテレビや新聞でさわいで知ったみたいです。私の白人の友達はずごくシンパシー（同情）してくれました。

I : そうそう。多くの人（一般的なカナダ人）が、私たちがインターンメント（Internment）されたのも知らなかったと、当時（80年代）ティー・ブイ（TV テレビ）でやっていました。

筆者：でもある意味知らなかったで済まされることと済まされないことがありますよね……。

T : そうゆうこともあってミセス・カメガヤは、私たちがどんな扱いを受けたのか形にして残しておいて、特に若い人たちに知ってもらいたいという願いだっと思います。今はここらあたりのエレメンタリー・スクールの子どもたちとか、オンタリオとか、アメリカからも見学にやって来ます。

I : このまえはオハイオからカレッジ・ステューデントが来ました。

筆者 : 一年間でどれくらいの人が見学にきますか？

I : アバウト・ワン・サウザンド(約千人)です。その内フィフティ・パーセント(50%)がツーリスト、フィフティ・パーセント(50%)がスクールです。

筆者 : 現在、協和会のメンバーとしてセンターをやっておられるお二人が、そういった若い人たちに一番伝えたいこと、もしくは思いというのがおありだと思いますが、それらについてお聞かせいただけますでしょうか？

I : 差別が無いようにという思いです。それに自分たちのお父さんやお母さんのカルチャーをリスペクトして大切にすることです。

T : 同じように差別をしてはいけないという思いです。それと、自分で将来を決める自由の大切さです。私たちはカナダのガバメントによってあっちこっち行かされました。私は生まれ育ったバンクーバー・アイランドからヘイスティングス・パークへ行かされ、ここニューデンバーへ送られ、タシメ(Tashme)へ移って、そして日本へ行って、またニューデンバーにもどってきました。新しいところへ行くたびにまたボトム(底辺)からやりなおさないといけなかったです。あっちこっち行ったのはどれも自由に決めたんじゃなかったですね。若い人にはじぶんのエフォート(努力)で自由に自分の道を決めて行ってほしいです。そのためにもわけのわからない差別はいけません。

筆者 : やはり差別はいけないと発信するというか……、社会に向かって言い続けていかないと差別はなくならないのが現実ですよ。自由とか平等とかデモクラシーとか、そういった理念はたぶん努力目標であって、現実に暮らしていると色々な人達の欲や思惑の中で、自らの居場所を作り上げて、それを守って行くということになりますよね。

T : 最初にヘイスティングス・パークへ行かされた時には、何かの間違いだと思っていましたよ。でも今から思うと国の力がいかに強いかということです。紙切れ一枚のノティ

フィケーション（notification 通知）で、多くのジャパニーズ・カナディアン的人生が変わってしまいました。トゥエンティフォー・アワーズ（24 hours）の内に手荷物だけまとめて、行き先も分からないまま連れて行かれるわけですから。考えている暇なんかなかったですよ。こう何というか……あつというまに波にさらわれていくという感じで……。

筆者：なんかその時の感覚が分かるような気がします。今からふりかえるとあいつた時代背景があって、こうゆうことだったんだ、と大きな全体を見渡すことができますが、その時は自分の身近なごく限られた情報しかないわけですから、何がおこっているのか分からないですよ。しかもある日突然自分たちとは関係の無いところで戦争になって、突然強制収容と財産没収ですから……。なんというか……人生のはかなさというか……あつけなさというか……。なぜ私たちがこんな目にあうんだという思いでしょうね。

T：それはありました。私たちはカナダで生まれ育ったセカンド・ジェネレーションです。まさか生まれ育った国がそんなことをするとは思っていなかったですよ。

筆者：んんん……。私の研究テーマの一つでもあるんですが、お二人はご自分を日本人だと思えますか？それともカナダ人だと思えますか？それともハイフン付きの……つまり、ジャパニーズ・カナディアンだと思えますか？

I：私はカナダ人だと思っています。日本語の読み書きはできませんし……カナダで生まれ育ちましたし、子どもたちもカナダで生活しています。日本のことは気にはなりますが、私が生活するところではありません。

T：私はジャパニーズ・カナディアンですかね……。日本でも暮らしたことがありますからね……。

筆者：一世の、つまりファースト・ジェネレーションの人たちはどうだったと思えますか？

T：お父さんやお母さん達のジェネレーションの人達は、日本で生まれ育って、カナダに来たので英語はほとんどできなかったですね……。船に乗ったり（漁師）、百姓や商売をやった人が多かったですけど、ほとんど日本人が相手だったから……。日本人でしょうか。

筆者：子どもさんたちはどう思っていると思われますか？

I：子どもたちのジェネレーションはジャパニーズ・カナディアン（日系人同士で）とマリージ（結婚）する人は少なくなっています。たしかエイティかナインティ・パーセンテージ（80%か90%）とかこの前でおったんですけど、ジャパニーズ・カナディアンでない人とマリージ（結婚）します。私の子どもも白人としよりました。

T：私の子どももコテージョン（白人）と結婚しました。だんだん日本的なものもなくなっていくと思います。

筆者：やはり色々な国から来た人たちがなりたっているカナダは、意識的に努力してオリジナルの文化を残して行かないと消えて無くなってしまいますよね。そういう意味では多文化主義つまりマルチカルチュラリズム（Multiculturalism）をカナダ政府が国の方針として進めているのは歓迎されるべきことなんでしょうか……。しかし一方では、いろいろなエスニック・グループ（Ethnic Group）が自分たちの利益を主張して様々な問題があると聞いていますが……。マルチカルチュラリズムについてどのように思われますか？

I：マルチカルチュラリズムもいいと思いますが、実際には色々なグループがけんかしています。もっとオープン・マインドでなければいけません……。しかしマルチカルチュラリズムはもっと進んでいくと思います。

T：色々ニュースペーパーやティー・ブイ（テレビ）でやってますけど、けんかばかりしてはいかんですね。もっと相手の立場になって考えることが必要だと思います。マルチカルチュラリズムをどうやっていくかはそこにいる人次第だと思います。変な方向に行かなければいいと思いますが……。

筆者：結局、マルチカルチュラリズムのような概念的な主義は……もしくは、こういうことをみんなで目指そうという考えは、一人一人がどのように解釈しどのように実行するかにかかっていますよね。つまり、マルチカルチュラリズムをみんなで育てていくという意識がないと、結局自分たちの利益を達成させるための道具にマルチカルチュラリズムがなってしまいますよね。それは戦争中に、デモクラシーとか自由とかが、結局は当時の権力者にいいように解釈されジャパニーズ・カナディアンの方が差別され、インターンメント・キャンプという不当な扱いを受けたのと同じことになってしまうんじゃないでしょうか。

T : そう思います。結局は人次第だということです。

筆者 : マルチカルチュラリズムといえば、アメリカでは例の 2001 年の 9.11 テロ以降、イスラム教系の人達や、アラブ系の人達が、社会の風当たり……つまり差別されていると聞きますが、こちらへんではどうでしょうか？

I : ここいらにはそういった人達がいなくて……。ただ都会では差別なんかがあるかもしれないですね……。また、エアポートではずいぶんセキュリティ・チェックがきつくなったと聞いています。

T : この前、子どものところに行くためエアポートに行ったら、それはきつかったですよ。今までカバンを開けられたことがなかったんですが、中の方までチェックされました。日本から来られたときどうでしたか？

筆者 : 実はテロがあった翌年の 2002 年にも学生を引率してカナダにきました。その時セキュリティ・チェックが厳しくて、爪切りも手荷物に入れることができませんでした。バンクーバーでのキャッスルガーへの乗り継ぎのときにも、時間が無いのにすべてのカバンを開けてチェックされましたから、間に合うかどうか心配しました。帰国するときもバンクーバーのインターナショナル・ゲートのセキュリティ・チェックで 300 メートルくらい人が並んでいて、どう見ても数時間はかかるようなんです。ボーディングまで 40～50 分くらいしかないので心配していたら、現地の旅行社がグループ客専用のセキュリティ・エントランスから入れてくれましたからほっとしました。今回 (2005 年) のフライトでは、そこまでは厳しくなかったですが、カバンは開けられますし、いまだに爪切りを手荷物に入れることはできません。爪切りでテロができますかね。

I : 国がやっていることに従いませんと (飛行機に) 乗せてくれないですからね。

T : 自分たちのとは関係ないところで色々なことが決まって……それらを押しつけられる……変な差別が起こらないことを祈るだけです……。

筆者 : センターの中に色々な展示がしてあるところがありますが……。

I : 協和会ホールですね。

筆者 : はい。どれも貴重な当時の資料ばかりで大変勉強になり、私の調査の参考になります。

出口手前の一番最後の展示物が丸い鏡で、そこにリフレクション (REFLECTION) と書かれてあるだけなので……なんかその……今までの展示物とあきらかに流れが違うのですごく印象に残るし、だからこそ、そこにセンターからのメッセージが込められているのではと思うのですが。また、近くに湖畔庭園というのがありますが、その英語名がリフレクション・ガーデン (REFLECTION GARDEN) ですよ。何かこのリフレクション (REFLECTION) という語を使うのに、特別な理由はあるのでしょうか？

I : リフレクション (REFLECTION) はたしか……日本語で鏡のようにうつすという意味だと聞いたことがあります……。

T : そうそう。映し出してよく考えるとか……過去を振り返るとかいう意味があったと思いますが……。色々なセンターのものをみてもらって、鏡に映る自分のように、自分の身に置き換えてわたしたちの体験を考えて、差別がいかに人を不幸にすることなのか分かってほしいという願いです。

筆者 : そういえばあまり感情的な写真がありませんよね。こう……泣いているところとか、怒っているような……。それは意識的に……、それはセンターが写真を選ぶ時に、何かこだわりというか……どうしてそういった写真を選んだんでしょうか。もっと差別のダークな部分をアピールしたいのであれば、むしろ感情を表に出した写真の方がインパクトが強いように思うんですが。

I : あまり泣いたり怒ったりした写真ですとイモーショナル (emotional 感情的) なアンダースタンディング (understanding 理解、解釈) になりよると思います。イモーショナルではなくカームリー (calmly 冷静に) に、私たちのことをみてほしいと思います。

T : センターの色んなものをみて、自分で考えてほしいと思います。他の人がゆうて (言って) そう思った考えは、また他の人が違うことをゆうたらすぐが変わってしまうでしょう。その時だけのイモーショナルな理解ではなく……色々自分で考える……それに色々考えるプロセスが大事だと思うとります。

筆者 : 結局……、こう思ってほしいという強い……ともすると相手のイモーションに訴えかけ、考え方を改めてやろうというよりは、自分自身に置き換えて、自分で考えて答えをみつけてほしいということなんですね。つまり最後の鏡とリフレクション (REFLECTION) は、そのことに対する問いかけなんですね。

T : 皆さん（センターへの訪問者全員が）がそこまで（センターの意志をくみとって）とってこれればありがたいんですけど。

筆者：今後どのようにセンターをやっていくのか……何かありましたお聞かせ願いたいのですが。

I : もうここ（New Denver）に残っているジャパニーズ・カナディアンは8名しかいません。私たちもいつまでやれるか分かりません。

T : あの（協和会ホールの）仏壇もどうなるか分かりません。

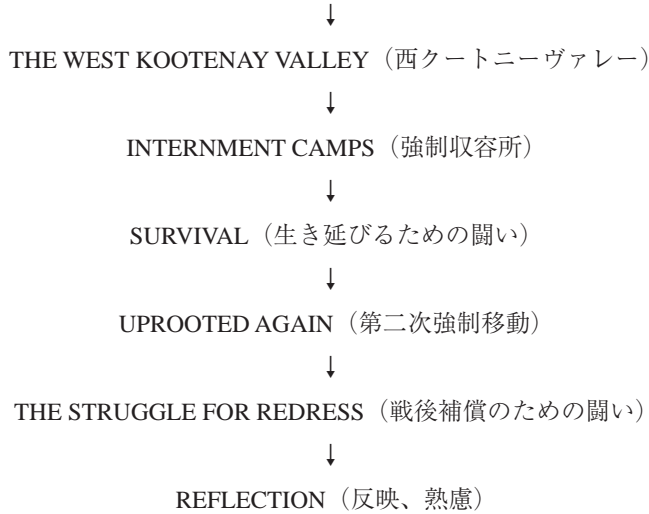
筆者：でもこれだけの施設なので、国（カナダ）がなんとかするんじゃないでしょうか。

T : ええ……やれるところまでやるだけです。

6. おわりに：調査結果に対する考察

日系収容メモリアル・センターにおける遺物は、簡潔でわかりやすく展示されている。これはキーワード的な小見出しを有効に使い、各々の展示に対する解説も必要最低限にとどめているため、展示全体がすっきりしてまとまりが良いためであると思われる。遺物が展示されている協和会ホールでは、具体的には次のような小見出しがつけられており（小見出しの横に筆者の日本語訳を添えた）、一目で内容が分かるばかりか順を追ってみていくだけで、日系カナダ人が歩んできた歴史的な流れをも把握することができるよう工夫されている。





このように歴史的流れを小見出しで分かりやすく表示されると、一世から二世の二世代にわたってようやくカナダの地に根を下ろし築き上げたすべてのものが、**PARL HARBOR** (パールハーバー) という小見出しが象徴するように、日本帝国軍の真珠湾攻撃という戦争によって奪い去られたという思いがみてとれる。また、各小見出しの内容に関連した遺物はもとより多くの象徴的な写真が用いられて、当時の様子が見学者に伝わりやすいようになっている。それらの展示すべてに共通したことは、視覚に訴えることによってまずは何かを感じてほしいということであろう。

遺物自体に関しては、当時一世が40～50歳代、二世は未だ20歳前後であったこともあり、日系社会は一世の影響が強く、物質面・精神面ともに日本的なものが多くみられる。柳行李やうちわ等の生活用品に関わる物質面だけでなく、日系人社会の結びつきという精神面に日本の要素が色濃く残っている。例えば、正月の餅つきや盆踊りなど様々な日本の行事が、コミュニティとしての精神的なまとまりに貢献した。またそれら行事の他、精神的なコミュニティのまとまりを後押ししたものが日本古来の仏教であった。特に信心深い当時の日系人にとって、人生の節目とも言うべき冠婚葬祭をどのように行うかは、自身の今までの生き様や家族のあり方が反映され、その後の人生に多大な影響を及ぼすものであったろう。とりわけ葬儀に関して収容所では、どのように行うかが現実の問題として切実であった。コミュニティの中心的な役割を果たす協和会ホールが一番奥まった上座に仏壇を置き、仏教寺院 (**BUDDHIST TEMPLE**) をホールが兼ねていたことが、いかに人々の精神的な結びつきに対して、日本の宗教である仏教が重要な役割を果たしていたのかみてとれる。

このように日本の行事や仏教など、日系人は自出国の文化や伝統を大切しながらカナダ社会に根を下ろしていた。そのような日本的な要素は、第一次強制移動、財産没収、強制収容、第二次強制移動という一連の不正義な要求をしたカナダ政府に対する対処の仕方にも顕著に表れ

ていた。当時の大多数の日系人は古来からの日本的な美德によってそれらの逆境に対処した。鹿毛（1998）はその美德について、日系一世または年長の二世は沈黙を守ることを美德とし、逆境の中でも文句や不平を言わず懸命に働くことによって信用を獲得するという価値観であったと指摘している⁷⁾。日系収容メモリアル・センターの遺物や展示は、政府に抗議することなく、生き延びるために懸命であったことを訴えるものばかりで、まさに当時の日系人は鹿毛が指摘した日本的な美德という価値観であったことを裏づけているように思われる。

展示の中でひととき異彩を放っていたものは最後の丸い鏡である。小見出しの ISSEI: THE PIONEERS（一世：開拓者）から THE STRUGGLE FOR REDRESS（戦後補償のための闘い）までは、歴史的な事実とそれに関連した当時の写真や遺物が展示されているが、最後の丸い鏡と REFLECTION（反映、熟慮）という語だけが、歴史的な流れにそぐわない展示であることは一目瞭然である。実際に筆者が展示物を見て回った時、出口手前にさしかかったところで自分が映ったその鏡をみて、一瞬奇妙な驚きに襲われてたじろいてしまった。それほど今までの展示の流れとは、明らかに異なる丸い鏡と REFLECTION（反映、熟慮）という語をあえて一番最後の展示物としているのは、それにセンターのメッセージが込められているからだ、多くの見学者が容易に感じ取ることができるであろう。そして、唯一センター以外でその地域において日系人との関わりを示す「湖畔庭園」の英語名は「KOHAN REFLECTION GARDEN」である。この REFLECTION という語がセンターの最後の展示と一致するのは、単なる偶然ではなかろう。その語に特別な思いが込められていよう。英和辞典によると REFLECTION の意味は、「反射」「反映」「（鏡などに）映った影」「熟慮」⁸⁾とある。筆者が初めてセンターの鏡と REFLECTION という語を見た時、「これは日系カナダ人の歴史を、見学者自身に反映させて考えてほしいというメッセージに違いない」と直感的に感じた。実際、センターの運営者に対する聞き取り調査で、REFLECTION の語に込めた思いを「自分の身に置き換えて私たちの体験を考えて、差別がいかに人を不幸にすることなのか分かってほしい」と述べていた。この「自分の身に置き換える」ということはある意味、どのように心に映し出すかは見学者自身の意識に任されているともいえよう。この受け手に委ねるという考え方はセンターの展示内容にも一貫していると思われる。遺物は何か強烈に思いを押しつけるというよりは、むしろ理路整然と淡々と展示されており、社会的に疎外されながらも出自国の文化を大切に、誠実に忍耐強く苦難を乗り越えたことを示唆するものばかりである。展示されている写真は、怒りや悲しみを表している感情的な写真は一枚もない。むしろ写真によっては、笑顔さえ見せているものもある。これら展示のための遺物や写真の選別は、意識的にそのようにしたのであろう。この展示物の選別にはすでに終戦時からかなりの時が経っていたことと、戦後補償が叶ったことが大きく作用していると思われる。センターの目的として日系カナダ人が受けた不当な扱いを二度と同じことが繰り返さないように、日系人の歴史をとどめておく使命感があったのと同時に、1994年の7月にセンターが開館されたということは、戦後約50年余りが経っていたので、自らの屈辱的な歴史もある程度客観的に捉えることができたのではなかろうか。さら

に戦後補償が叶いカナダ政府が謝罪しているので、ことさら怒りを全面に出す必要もなかったであろう。故に、センターの展示は戦時中の不当な扱いに対する抗議というよりはむしろ、日本の宗教、行事、持ち物、庭園などが展示の中心で、このことはカナダという国民は色々な国から来た人々が住んでおり、そのような文化的多様性が保証され、誠実に努力してカナダの地で生きる決意をした人々が、安心して暮らしていける社会を築く重要性和必要性を投げかけているように思われる。その投げかけも REFLECTION という語が象徴するように、見学者自身が自分で考え、自分で気づくことが、本当に理解することなのだという捉え方であろう。

センターの運営者である、日系二世のイノセ夫人とタカハラ夫人への聞き取り調査においても、この「自分で考え自分で気づく」といういわば見学者が能動的に学ぶことの大切さを強調している。また、感情的な議論ではなく冷静に「差別」をみつめ、考え、感じ取ってほしいという運営者としての願いである。感情的な議論は、ともすると過去のわだかまりを蒸し返し、新たな軋轢を生じさせかねない。運営に一貫していることは、差別がない平和な社会の実現であり、そのために日系カナダ人が受けた国家による不正義と差別的な処遇を後世に残し、二度と同じことが起きないようにすることである。感情に訴えかけた受け身の学びで、差別を本当に理解できるものではないという捉え方である。さらに、両夫人は差別を根絶するには異質なものへの寛容と許容が必要であることを主張している。このことからセンターでは、日系カナダ人が日本文化をいかに大切にしているのかを見学者に訴える遺物の展示を意識的にしているのが分かった。これは、親が生まれ育った国の文化、自らも幼少期から折りに触れてきた身近な文化を大切にできない者が、他の文化に対して寛容な態度を取り、許容することなどできるはずがないという考えからである。その点、多文化主義は違いを認め合い差別を是正するという理想的な考えではあるが、この様な理念は、結局は、人がどのように理解し、どのように行動するかにかかっているという両夫人の捉え方である。つまり理念には所詮限界があるという思いは、カナダに生まれ育ったにもかかわらず、自分達にはデモクラシーという理念は適用されなかったという苦い経験から来ているものである。故に、多文化主義を歓迎する一方、その危うさを懸念するのがみてとれた。

さらに、聞き取り調査で判明したことは、社会の中での国家と個人の関係において、いかに国家権力のもとでは個人が無力な存在なのか、また、個人にみえている社会的な情報がいかに断片的なものなのかという思いである。それは、国家の強権的な命令の度に、それまで積み上げてきたものをすべて失い、その都度一からのやり直しが求められた。また、数十年の時を経て過去を振り返りようやく点が線になり、当時の全体像がみえてきたという自らの経験からきているものである。その意味で、9.11 テロ後に国家の主導により一部の人々が危険人物扱いされること、それにより一般の人々も自らの断片的な情報だけで差別に走ることに對して危機感と嫌悪感を抱いている。自分達のやれる範囲で、多文化主義に対する継続的な働きかけ、並びに差別の根絶のために最善を尽くすというセンターの運営者としての思いであることが分かった。

(注)

- 1) 大石文朗、『日系カナダ人の残された戦争の記憶・・・現カナダ社会の青年世代との関わりに焦点をあてて』名古屋市立大学大学院（博士論文）、2007年3月、の一部を加筆・修正した。
- 2) ブリティッシュ・コロンビア州安保委員会（British Columbia Security Commission）と交渉する目的と、互いに生活を助け合う互助会的な目的の組織として、1943年にニューデンバーの被抑留日系人によって創設された。
- 3) Nikkei Memorial Internment Centre のホームページ参照。
- 4) Adachi, K., *The Enemy That Never Was: A History of the Japanese Canadians*, Toronto, McClelland & Stewart, 1976.
- 5) 1943年以降、道路建設／労働キャンプ（Road Camps/Work Camps）やシュガー・ビート農場（Sugar Beet Farms）から徐々に解放された男性は、家族と一緒に強制収容所（Internment Camps）で暮らすことが許されるようになった。
- 6) *A Path of Leaves: a guided study to the Nikkei Internment Memorial Centre*, Kyowakai Society, New Denver, B.C., 1999, p. 43.
- 7) 鹿毛達雄『日系カナダ人の追放』明石書店、1998年、211頁。
- 8) ジーニアス英和辞典第3版、大修館書店、2003年。